よれば、言語は人間の実践行然としてのみ成立する。尤もこれには社会的約束としての言語行為の型を忘れているという批判もあるが、時枝の場合、文学は言語そのものでもある。今、クローチェと時枝とを並べてみると、文学が芸術であると同時に、言語は表現であるといった時枝言語学の主張が、無理なく引き出されてくる。

しかし、このような構想も更に細かい具体的な点になると、エドワード・サピアーのように、科学の基となっている思惟とは、言語的表現ではなくて、言語から衣裳を剝ぎ取った言語的過程であるという。また、表現の一回生起的性格ということから、クローチェは、文学における飜訳は不可能であると言ったが、サピアーは、実際には驚くほど適切な飜訳があるとして、普遍的で非言語的な文学と、他に移し得ない言語的な文学とが、文学の世界では交錯していると言っている。

二、古代人の言語

表現の場においてこそ言語の実態があるという近代的言語観は、文献に表現されたものこそ文学であると考えた過去の文献学派の文学観を当然反省しなければならぬ契機を含んでいる。但し、高度な芸術性という面を取り上げる場合は別である。とにかく、そうした意味で言えば、口誦文学は表現そのものとして、文学として当然扱われなければならない。

口誦文学として最初の出発をした古代の文学が、まず表現の場において、単なる伝達のための言語行為と異った面は何であったか。それは神を感動せしめるだけの力であったと思われる。折口信夫における文学信仰起源説の根本理念である。神を感動せしめる力は、後世次第に人間を感動せしむる力として働くようなった。これが文学成立の基本である。最初、神を感動させる力はどこから生じたか。それは言語行為の作為的な技術としての言い廻しや発想方法からきたものではなかった。それはとりも直さず、言語そのもののもつ神秘的な力であったと考えられる。言語にそのような力があったと考えるのは古代人の思想である。旧約聖書の創世紀以後、わが国の文献にも多くの証左がある。オグデン・リチャーズの「意味の意味」、イエスペルセンの「人類と言語」などにも強調されるところである。とにかく、言語のもつ神秘力を日本では言霊と言った。この言霊の本質こそ、言語行為の場において、それも口頭表現の場において発揮されると考えられたのである。その神を動かす言霊の思想が、呪文・呪詞となり、対象が人間を志向するところとなって文学と言われるようになったのである。

古代社会と言語

――「本辞」の背景――

緒方惟章

言語表出の活動がその本来的な性質よりしても社会性を免れ得ぬものであることは申すまでもないが、ここでは所与のテーマ「古代社会における言語活動のあり方」を特に古事記生成の基盤をなす「本辞」の解明なる一点に絞り論ずることとしたい。

さて、古事記がその編纂の過程にあって「諸家の賫たる帝紀と本辞」とを資料としたことは上表文に照らして明らかである。よって、従来より古事記研究者の多くの関心が現行古事記の本文の検討を通じて「帝紀」「本辞」の本質の究明に向けられてきたことも当然と思われるのである。今、「帝紀」「本辞」に関して展開された従来の諸説の中主なものを示せば次の二系統に大別されるのである。即ち㈠古事記は「帝紀」及び「本辞」の二者の結合・補綴された形態をとる、㈡「帝紀」「本辞」の二者は必ずしも同一次元で論ずべきものでなく、従ってこの二者が結合・補綴せられて古事記を成立せしめたとは考え難いこと、の二系統である。前者には倉野説（「古事記序文註釈」）があり武田説（「帝紀攷」「古事記説話群の研究」）がある。この両説には大差はなく、歴帝の御名・皇居・治天下・后妃・皇子皇女・重要な御事蹟の簡単な記事・宝算・崩御の年月日・治世の年数・山陵に関する記事これらを帝紀と見做し自余を本辞とするものである。これに対し後者には徳田説（「原始国文学攷」）・

太田説（「古代日本文学思潮論(Ⅱ)」）があるが、この両説は聊か趣きを異にしている。即ち徳田説が「古事記の原資料たるものは先旧辞（本辞）であり帝紀ではない）とし、「この旧辞の出所は諸氏の氏文・雅楽寮の舞楽・神語祭詞・起原伝説その他宮廷の古伝などにあったものであろう」とされるに対し、太田説は「（古事記の）素材内容としては皇室中心の累代の相続志として帝皇日継とでも帝紀・先紀とでも呼ぶにふさわしいものが、ある条件のもとにおいてすなわちある様式（筆者注、太田氏はこれを意図的に由緒ある口頭表現とされる）をとっている時に先代旧辞とも本辞・旧辞とも呼ばれてよかったのである」としておられる。

さて、この後説、ともすれば従来前説を以て通説と見做してきた大方の研究者に対しては甚だ奇異の感を与えるものであろう。が、かかる観点に立つ時古事記はその成立の事情を我々に朧げながらも示すことになろう。帝紀的要素と本辞的要素とはまさに次元を異にする対極的なあり方であったのだ。それは「帝紀本辞結合説」を採られる諸家が一様にその説かれる帝紀的要素・本辞的要素の摘出に困難を訴えられる神武・応神両記のあり方にも関わる問題でもある。この両記が古事記にあってとりわけ重い位置を占めるものであるだけに、かかる帝紀・本辞不可分の形態をして原資料の原形を窺わせぬ迄に整備された完成の姿と見るか、はたまたこれこそ原資料の俤を窺わしめる本源的な相と見るか意見の分かれるところであろう。が、ここに私見を示せば、この形態こそ古事記の原形であり古事記存立の基盤であるということになる。両記にわたり余りにも顕著な内容の重複――実は神武・応神と並び神の諡号を有する崇神天皇の記をここに配すれば一層明らかとなろうが――こそは、漢風の史書の体裁を目指し、各代の天皇の個性を重く見、かつ皇統の連綿たることを主張せんとする帝紀的立場にも拘らず遺された、〈鎮魂詞記〉としての古事記の本質的なあり方――本辞的領域の徴証であったといえよう。古事記の本質は天皇の神格完成およびご即位の経緯、そのご結婚および御子生みの物語に尽きるのであり、その同じき主題が微妙な変化を見せつつも歴帝のご事蹟として反復さるべき性質のものであったのだ。

かかる本辞的領域が書記された資料というよりは口誦的な特質を顕わに示し、時に芸能的特質をさえ見せているということは注目される。その最も著しい例としては応神記〈国主の奏〉の条が挙げられよう。ここには国主が己が氏族の霊魂の象徴たる剣を奉り、己が氏族の霊魂を篭めた国主酒を奉献し、さらに己が氏族の霊魂を篭めて奏をなしている趣きが明瞭に看取されよう。即ち、本辞の背景には〈言霊〉の信仰が脉々と流れ続けているのである。

中根千枝氏のいみじくも看破せられた〈タテの社会構造〉なる日本社会の構造体系（「タテ社会の人間関係―単一社会の構造―」）は、氏族霊の奉献という形式をとって古代社会にも厳として存在する。しかして、それが〈言霊〉の信仰と結ばれて存在するところに古代社会の一の特質も存し、かつ古代社会と言語の一の関わりも証されるものといえるのではあるまいか。

古代文学と言語

小野　寛

このテーマは古代文学研究者にとってまことに「切実な問題」であり、いつも気になっている問題であるが、非常に「厄介な問題」である。私は先ず高木市之助、時枝誠記両碩学に学びたい。

高木博士のこの問題に関する諸論考は「古文芸の論」に収められているが（「文芸の技術的性格について」「近代詩―源流を考へる」「文芸と言語」など）、結論的に、文学と言語の関係を否定的に考える立場をとっておられるので、私は仮にこれを「言語否定説」と名付けた。博士は芸術の本質として技術の観念を導入され、三木清の「構想力の論理」から「形」の概念をとり入れられた。技術によって作られたものは形を有するのであって、形の見られる限り技術が見られるとするものである。文学においては、それは「ことばの技術」である。それは―博士は「言語的なものを止揚して、その彼